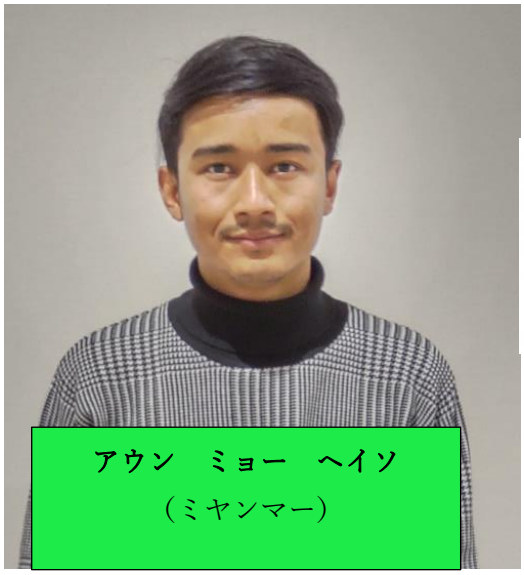
# オリーブ通信

2024 年
2 月号
2024.2.17.発行
第262 号

http://www.ne.jp/asahi/olive/kusatsu/

## あたらしい仲間（なかま）を紹介します



アウン　ミョー　ヘイソ
（ミャンマー）

ムハンマド　アルハム　ソリフッディン
（インドネシア）

## 中川先生のへんてこ日本語　160

### 災害時の日本語

まずもって、元日に発生した「令和６年能登半島地震」で犠牲になられた方々、被災された方々に、衷心よりお見舞い申し上げます。

元日早々であっただけに驚きは大きい。地震発生直後テレビをつけた。NHK では、「早く、早く、できるだけ高いところへ逃げてください。テレビは見なくてもいいです。」などと、女性アナウンサーがしきりに繰り返している。力強く、訴えるように。あのアナウンスに感動したと、絶賛の声が多く届いているようだ。あのアナウンスに命を救われた人もいたのではないだろうか。

なんでもあの女性、NHK に入社して最初に赴任したのが金沢だったそうで、災害の様子が眼前に広がってくるようだ。

東日本大震災以来、「災害時の日本語」として、「わかりやすい日本語」が研究され、実践されてきた。殊に外国人の居住地域では、いかに分かりやすく、的確に情報を伝えるかが重要になる。筆者自身もこの分野には関心があり、稚拙な論を発表しているが、今回のアナウンスを聞いて、目が覚める思いであった。この数年間議論されてきたことが、ここで目（耳）の当たりにすることができ、不謹慎ではあるかもしれないが、嬉しかった。さすがに天下のNHK、訓練を受けているのだろう。

ところでよく利用するスーパーへ行くと、こんなアナウンスが聞こえてくる。「こちらは、○○警察署です。自転車を駐輪する際は、必ず施錠してください。」この日本語難しくないだろうか。「駐輪」「~際」「施錠」は、かなり難しい。子供や外国人も「自転車を止める」ことを考えると、やさしくわかりやすい日本語でアナウンスしてほしい。

「災害時の日本語」が使用されることがあっては困るのだが、日ごろから情報伝達の方法に気を配っておくのがよかろう。

京都外国語大学　日本語学科教授　中川良雄

# 日本語学習支援者セミナーに参加して

1 月 28 日にキラリエで行われた令和 5 年度 第 5 回日本語学習支援者セミナーに参加してきました。

主催は滋賀県地域日本語教育推進事業 事務局（滋賀 YMCA)、講師は地域日本語コーディネーターの北川恵子先生と地域日本語主任コーディネーターの片平協子先生で、オリーブからは 3 名の参加がありました。

今回のテーマは『日本語初級クラスのコースデザイン』で、それぞれの学習者のニーズに合った授業計画の立て方やテキストの選び方、何をどう教えればいいかといったお話があり、ワークショップも行われました。

ちょうど今私が担当している学習者も初級で、本人からはテキスト勉強よりも会話をしたいといった希望があり、でも日本語の基本的な構成や文法をよく知らない状態では会話は難しく、結局テキストに従って授業をしている状態だったので、今後の授業の進め方を考えるにあたって色々と参考になるセミナーでした。

また、「一度に覚えられる言葉は 7±2 個」や「文字を目で追うより耳からの音声リピートの方が定着しやすい」「毎回の授業に小さな達成感が得られるような練習を取り入れること」など、昔教わっていたのにすっかり忘れていた基本をあらためて教わることができました。

なお、今回のセミナーでは、講師の片平先生と北川先生が制作・編集に関わられた滋賀県作成の初級向け教材『くらしの日本語 in しが』とその『使い方マニュアル』と『ひらがな・カタカナ 練習ノート』を各一冊ずつオリーブにいただきました。

『くらしの日本語 in しが』とマニュアルは下記 URL や QR コードからも PDF データがダウンロードできるようですので、必要な方はぜひどうぞ。

https://www.pref.shiga.lg.jp/ippan/kurashi/kokusai/319833.html

（レポート：Emi Uchida）

# 「デカセギ文学」ってご存じですか？

「デカセギ文学」というものをご存じでしょうか？　新聞より抜粋になりますが、興味深いと思いまして紹介させてください。

今から34年前の1990年、入管法の改正を機に日系ブラジル人の間で話題だった「デカセギ」が大ブームとなった。日系3世のアンジェロ・イシ氏は、彼らの文化活動に着目し、作品を収集してきた。

日本において移民は労働力として、あるいは日本社会との軋轢の文脈で語られがちだ。在日ブラジル人たちによる多様な表現の開花を、同時代の日本人は知らず、また関心も持たれなかった。

日系人が記した「デカセギ文学」として、まず挙げたいのがシルビィオ・サムの小説「ソーニョス・ケ。デカセギ」だ。ブラジルからデカセギにきた工場労働者の苦闘を描く。印象的な作中歌「デココセーギ♪」は「デカセギ」とポルトガル語の大便を意味する発音「ココ」を掛けており、デカセギの 3K 労働を痛烈に表現している。

作者はデカセギ労働者であると同時に人材派遣会社の通訳兼世話役を指す「tantosha/担当者」も務めた。小説にも担当者が登場する。担当者は雇用側と労働者の「中間」に位置し、それゆえの豊かな経験と複雑な悩みを抱える立場。この複数性はブラジルでは「中間層」である日系人たちの表象とも重なっていよう。

アジェノール・カカズのノンフィクション「クロニカス」は、アンジェロ・イシが90年代に編集長を務めた在日ブラジル人向けポルトガル語新聞「ジャーナル・トウード・ベン」の連載をまとめた著作。複数回に跨る渡日の記述は希少で、記録的価値が高い。フライト状況や機内食で受けたカルチャーショックなどをつづり、デカセギ先発者の無邪気な期待感を精緻に伝える。

当時は日本発行のポルトガル語新聞がもう一つあった。その「インターナショナルプレス」に連載されてのがセルジオ・マホエの「モーターサイクル・ボーイ」だ。日本から中東、アフリカを経由しブラジルへ戻るバイク旅行記だが、旅を遂行するためのお金の話が大きな比重を占める。節約、送金、換金はデカセギ者の関心そのものであり、このルポは同胞の困難克服の物語として在日ブラジル人たちの熱狂を読んだ。

ここに挙げた作品はポルトガル語で書かれ、ブラジルにおいて刊行された。それでも「メイド・イン・ジャパン」の日本文学の新ジャンルと考えられている。 今後は日本語にたけた在日2世を中心に日本語での執筆が盛んになっていくだろう。

音楽の歌詞に目を転じれば、すでに日本語による表現が活発になっている。
例えば2000年代には在日ブラジル人と日本人によるヒップホップグループ TENSAIS MC’s が反響を呼んだ。日本語とポルトガル語のバイリンガル歌詞のほか、一つの曲に2か国語で別の歌詞をつけたこともある。日本語版では差別や偏見への抵抗を叫び、ポルトガル語版では同胞を叱咤激励する内容と異なるメッセージを発した。

近年では在日ブラジル人、ペルー人、日本人からなる GREEN KIDS に注目が集まる。彼らの音楽は役所広司主演映画「ファミリア」のサウンドトラックにも採用され、メンバーが出演した。その歌詞には良くも悪くも在日の先行文化を意識しない、のびやかさが漂う。

「デカセギ文学」はこの先、定住、永住者の「在日ブラジル文学」として発展してゆくだろう。在日2世による日本語の長編小説が話題になる日を待ち望んでいる。

（出典：日本経済新聞　2024年1月26日）

## 先月の活動（1 月）

日本語教室　1/6(M), 13, 20, 27　(4 回)
日本語学習支援者セミナー　1/28(恩地,内田)

## 今月の活動予定　(2 月)

日本語教室　2/10、17(M)　(2 回)
オリーブ新年会　2/3
BNN　日本語スピーチ大会　2/25　(田中英, 福井)

●日本語教室の(M)は定例ミーティング　　●(　)内は参加者、または　参加予定者。敬称略

## 参加人数　（1 月）

| | 1/6 | 1/13 | 1/20 | 1/27 |
|---|---|---|---|---|
| 生徒 | 23 | 28 | 30 | 29 |
| 先生 | 21 | 31 | 26 | 30 |

## 会員の動き

〈入会〉　無し
〈退会〉　無し

## 祝！　日本語能力試験合格！

N1　合格　ラヤン・ハミッドさん

N2　合格　ブイ・ヴァン・チャムさん

N2　合格　ス・ス・サンさん

＊編集後記＊

早くも２月号となりました。
今年は OLIVE の３０周年パーティもあるし、忙しい年になりそうです。
個人的にはそろそろ旅行などもしようと思い、さて久しぶりに旅行好きな方々との新年会に参加しました。
やはり実際に人と会うのはよいですね。出不精で面倒くさがりの私ですが、出かける事、人と会うことの良さを感じました。
健康に気を付けつつ、体験やら面会やらを楽しむ一年としたいですね。　（ナカミゾ）